

研究

正感情と認知的再解釈コーピングの関連について

—高校生における抑うつ予防プログラム構築のための基礎研究—

貴志知恵子¹⁾, 内田香奈子²⁾, 山崎 勝之³⁾

〔論文要旨〕

この研究の目的は高校生において正感情と認知的再解釈コーピングとの関連を調べたものである。参加者は高校1・2年の男子285名と女子389名である。参加者は正・負感情はPositive and Negative Affect Schedule (以下PANAS)の日本語版, 認知的再解釈コーピングは, 一般コーピング質問紙 (General Coping Questionnaire : GCQ) の状況版に記入した。それらの2つの尺度は5週間間隔でT1, T2, T3の3回実施された。階層的重回帰分析の結果, T1の3つの変数をコントロールし, 男女ともT2の認知的再解釈コーピングはT3の正感情に有意に影響を与えていた。これらの知見は正感情と認知的再解釈コーピングの正の関連を示していた。抑うつ予防プログラムや学校不適応での正感情と認知的再解釈コーピングの充進の可能性が論議された。

Key words : 正感情, 負感情, 認知的再解釈コーピング, 抑うつ, 高校生

I. はじめに

高校生の時期を含む15~19歳の年齢における死亡原因の第一位は自殺¹⁾であり, その自殺の原因で最も多いのがうつ病となっている²⁾。このことから, 高校において抑うつ等の精神的健康問題に早期に対処する試みが求められている³⁾。しかし, 抑うつに早期に対処する教育を行う場合, 抑うつ自体に負感情が含まれており, クラスや学校のすべての生徒を対象に行うユニバーサル予防として負感情に介入することは教育現場には馴染みにくい。そこで, 負感情に拮抗する正感情を介入の操作因子とする抑うつ予防に着目した。正感情は, 健康や適応にさまざまな恩恵をもたらすことが多くの研究で示されている⁴⁾。また, 本論文では正感情に正に関連する今一つの変数として認知的再解釈

(cognitive reinterpretation)コーピングを取り上げた。

Folkman ら⁵⁾はコーピングについて「内的・外的要求やそれらの間の葛藤を克服し, 耐え, 軽減するためになされる, 認知的, 感情的, 行動的努力を意味する」と定義し, 問題焦点型コーピング (problem-focused coping) と情動焦点型コーピング (emotion-focused coping) に分類してきた。この問題焦点型に属する1つのコーピングとして「ストレス事象に正の意味を見出すコーピング (finding positive meaning coping : FPM コーピング)」について, これまでの研究では正感情との関連が深いコーピングである⁶⁾という知見があるが, このFPM コーピングは, 認知的再解釈コーピングとはほぼ同義であると考えられる。また, Fredrickson ら⁷⁾は, 正感情が, 認知を広める, つまりわれわれの認知や行動の範囲を広げるコーピングで

A Prospective Study of the Relationship between Positive Affect and Cognitive Reinterpretation Coping in Senior High School Students

Chieko KISHI, Kanako UCHIDA, Katsuyuki YAMASAKI

1) 徳島文理大学人間生活学部 (研究職)

2) 鳴門教育大学予防教育科学教育研究センター (研究職)

3) 鳴門教育大学大学院学校教育研究科 (研究職)

別刷請求先: 貴志知恵子 徳島文理大学人間生活学部 〒772-0015 徳島県鳴門市撫養町北浜字宮ノ西87

Tel/Fax : 088-686-1002

[2262]

受付 10. 8. 5

採用 11.10.26

ある認知的分析 (cognitive analysis : 認知的再解釈に類似) をもたらし, 同時にこのコーピングが正感情をもたらすという, 相互の因果関係を明らかにしている。

しかし, 正感情と認知的再解釈コーピングについて, 大学生や大学院生を対象とした Yamasaki らによる一連の介入研究⁸⁾では正感情は健康を高めるが, 認知的再解釈コーピングへの直接的な影響は認められず, 一方で, 認知的再解釈コーピングは正感情を媒介し, 健康を高めることが示されている。認知的再解釈コーピングが正感情と深い関係のあるコーピングであることや, 正感情を高めることが認知的再解釈を促すという関連は, 発達段階のより早い青年中期である高校生においても見出されるのであろうか。本研究は, 高校生を対象に, 正感情と認知的再解釈コーピングについて1回目 (T 1), 2回目 (T 2), 3回目 (T 3) の3回の調査を行いT 1からT 2への変化がT 2からT 3への変化について, 正感情気分が認知的再解釈コーピングにどのように影響するかを明らかにし, 正感情と認知的再解釈コーピングを利用した抑うつ予防の介入プログラムを構築するための基礎知見を得ることを目的とした。

II. 方 法

1. 調査対象者と調査期日

T 県の公立高等学校普通科進学校一校713名を調査対象とし, 自記式の質問紙調査を行った。欠損値があった者を除外し, 最終分析対象者は, 674名 (1年男子145名, 同女子206名, 2年男子140名, 同女子183名)であった。調査は3回実施し, T 1は2008年4月 (入学・始業式直後), T 2は同年5月下旬 (中間テスト後), T 3は同じく6月下旬 (期末テスト前) で, それぞれ約5週間の間隔で実施した。

2. 調査材料

i. 正感情・負感情の測定

Watson ら⁹⁾による Positive and Negative Affect Schedule (以下 PANAS) の日本語版¹⁰⁾を用いた。この尺度は, 正感情と負感情について評定することを目的として開発されたものである。正・負の感情に関する形容詞それぞれ8項目から構成されており, それについて, 最近2週間の感情状態について, 「全く当てはまらない (1点)」から「非常によく当てはまる (6点)」の6件法によって, 回答を求めた。項目の例と

しては正感情では「活気のある」, 「誇らしい」, 「強気な」など, 負感情では「びくびくした」, 「おびえた」, 「うろたえた」などである。本研究における α 係数は, 男子でT 1が0.85, T 2が0.88, T 3が0.89, 女子ではT 1で0.87, T 2が0.89, T 3が0.89を示し, 高い内的整合性が確認された。また, 妥当性は正感情, 負感情, 中性感情を実験的に操作した研究で確認されている¹¹⁾。

ii. 認知的再解釈コーピングの測定

一般コーピング質問紙 (General Coping Questionnaire : GCQ) の状況版¹²⁾を用いた。GCQ は, 問題焦点型コーピング (problem-focused coping) としての問題解決 (problem solving) と認知的再解釈 (cognitive reinterpretation), 情動焦点型コーピング (emotion-focused coping) としての感情表出 (emotional expression) と情緒的サポート希求 (emotional support seeking) のコーピング方略を測定する4下位尺度から構成されている。下位尺度には8項目ずつ含まれているので, 全項目数は32項目である。この質問紙は「最近あなたが直面している嫌な出来事や困っている出来事に対して」のコーピングを問い, 直面している出来事を具体的に記入したうえで, 項目に回答する方法をとっている。それぞれの項目の回答方法と得点化は「まったく行っていない (1点)」から「いつも行っている (5点)」の5件法である。本研究では, 研究目的に従い, 認知的再解釈の合計得点について分析した。認知的再解釈の項目は「問題の中で明るい要素を探そうとする」, 「起こった出来事を肯定的に捉えようとする」など8項目である。本研究での認知的再解釈の α 係数は, 男子でT 1が0.91, T 2が0.93, T 3が0.93, 女子ではT 1で0.91, T 2が0.92, T 3が0.94であり高い内的整合性が確認された。

3. 手続きおよび倫理的配慮事項

調査は, クラス毎に担任により教室で一斉に実施された。調査は高等学校の各クラスにおいて, 集団で実施し, データ識別のため学籍番号の記入を求めた。調査内容については, 教職員に事前に文書によって説明し同意を得た。実施にあたっては調査前に, 各クラスの担任より生徒に対して, 調査の結果を今後の学校保健の基礎資料とするという研究の趣旨を説明し, 同意を得た。また, 得られたデータは目的以外には使用しないことや, 回答者に不利益を生じることではないこと

などを文書で示し、担任より口頭で説明した。調査集計と統計解析には Windows 用統計プログラムパッケージ SPSS ver.18を用いた。

III. 結 果

1. 各変数の性と時期の主効果と交互作用

正・負感情と認知的再解釈コーピングの各変数において性(男, 女)×時期(T1, T2, T3)の[性別]という[対応なし]要因と調査を同一被験者が3回繰り返すという[対応あり]要因の2要因の分散分析を行った(表1)。まず, 交互作用の結果について述べる。

性の有意な主効果が負感情でみられ, 負感情は女子の方が男子よりも高かった。次に, 時期の有意な主効果は, 正感情, 負感情, 認知的再解釈のすべてでみられた。そこで, 交互作用がなく時期の主効果のみが有意になった正感情と負感情について Bonferroni の方法で多重比較の検定を行った。その結果, 正感情は, T1がT2よりも有意に低く, 同じくT2がT3よりも有意に高かった。また, 負感情については, T1がT2よりも有意に低く, 同様にT1はT3よりも有意に低かった。

次に, 有意な交互作用がみられた認知的再解釈について, 単純主効果の検定を行った。まず, 認知的再解釈の時期の単純主効果を男女別にみると男女ともに有意な差がみられた(男女の順に $F(2, 1344) = 6.44$, $F(2, 1344) = 12.31$ でともに $p < .01$)。そこで, 男女別に認知的再解釈について時期の要因の多重比較を行った。その結果, 男子については, T3とT1および

T3とT2の比較における差はそれぞれ有意であった(順に $F(1, 672) = 8.13$, $F(1, 672) = 10.97$ でともに $p < 0.01$)。次に女子の認知的再解釈についても時期の要因の多重比較をしたところ, T2とT1, T3とT1の差はともに有意であった(順に $F(1, 672) = 16.04$, $F(1, 672) = 19.17$ でともに $p < 0.01$)。

2. 各変数の相関

T1, T2, T3の正感情, 負感情, 認知的再解釈の変数間の相関をみるため, 男女別にそれぞれの変数間にピアソンの相関係数を算出した。結果は表2のとおりである。右上段は男子, 左下段は女子の結果を示している。その結果, 各時期において正感情は男女ともに認知的再解釈と中度~高い有意な正の相関を示した。また, 正感情と負感情の相関については, 女子が各時期とも低い~中度の有意な正の相関であったのに対し, 男子は無相関または低い正の相関となっていた。なお, 負感情と認知的再解釈の相関については, 男子で負の相関がみられたのに対し, 女子では正の相関となっていた。

3. 正感情から認知的再解釈への影響について

正感情が後続の認知的再解釈に及ぼす影響を検討するため, 男女別に, 2ステップからなる階層的重回帰分析を行った(表3, 表4)。これらの説明変数は, Aikenら¹³⁾にならい, 多重共線性(multi-collinearity)を回避するために, すべて各平均値からの偏差に変換した。第1ステップでT1の認知的再解釈, 正感情,

表1 各変数の平均得点(標準偏差)

		T1	T2	T3	主効果 ⁺		交互作用 ⁺
					性	時期	
正感情	男子	25.62(7.62)	27.67(8.78)	25.29(8.95)	3.04	46.51**	.70
	女子	26.18(6.96)	28.93(7.65)	26.15(7.85)			
負感情	男子	19.34(7.09)	20.88(8.60)	19.87(8.69)	32.47**	9.87**	2.28
	女子	22.39(7.93)	23.42(8.68)	23.67(8.61)			
認知的再解釈	男子	22.80(7.47)	22.89(8.05)	21.55(8.13)	1.89	13.88**	3.96*
	女子	24.10(6.59)	22.69(7.00)	22.45(7.70)			

N=(男子285名, 女子389名)

** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺F値

T1:入学, 始業式直後, T2:中間テスト後, T3:期末テスト前

多重比較の結果(正感情, 負感情, 認知的再解釈は Bonferroni の方法による)

(男子)

正感情: T1 < T2 > T3

負感情: T1 < T2

認知的再解釈: T1 > T3, T2 > T3

(女子)

正感情: T1 < T2 > T3

負感情: T1 < T2, T1 < T3

認知的再解釈: T1 > T2, T1 > T3

表2 T1, T2, T3の正感情, 負感情, 認知的再解釈の相関

	T1			T2			T3			
	正感情	負感情	認知的再解釈	正感情	負感情	認知的再解釈	正感情	負感情	認知的再解釈	
T1	正感情	.15*	.46**	.50**	.02	.37**	.52**	.08	.41**	
	負感情	.33**	-.07	.05	.55**	-.04	.08	.54**	-.06	
	認知的再解釈	.33**	.04	.40**	-.08	.53**	.42**	-.02	.54**	
T2	正感情	.58**	.19**	.20**		.18**	.48**	.52**	.05	.37**
	負感情	.20**	.58**	.07	.33**		.03	.05	.60**	-.07
	認知的再解釈	.28**	-.02	.55**	.35**	.06		.41**	.02	.57**
T3	正感情	.49**	.20**	.29**	.60**	.22**	.41**		.29**	.51**
	負感情	.28**	.59**	.05	.31**	.60**	.03	.33**		.01
	認知的再解釈	.19**	.00	.47**	.20**	.02	.63**	.35**	-.03	

右上段は男子, 左下段は女子の結果を示す

N=(男子285名, 女子389名)

** $p < .01$, * $p < .05$

T1:入学, 始業式直後, T2:中間テスト後, T3:期末テスト前

表3 男子におけるT3の認知的再解釈を目的変数とした階層的重回帰分析

ステップ	説明変数	β	t値	ΔR^2	F値変化量
1	T1 認知的再解釈 ¹⁾	.41	7.15***	.33	46.01***
	T1 正感情	.16	2.61**		
	T1 負感情	-.04	-.60		
2	T2 正感情	.14	2.37*	.01	2.82†
	T2 負感情	-.04	-.73		

モデル $R^2 .33(F(5, 279)=28.09, p < .000)$, β はステップ3の値

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$, 説明変数はすべて各平均値からの偏差

¹⁾認知的再解釈コーピング, T1:入学, 始業式直後, T2:中間テスト後, T3:期末テスト前

表4 女子におけるT3の認知的再解釈を目的変数とした階層的重回帰分析

ステップ	説明変数	β	t値	ΔR^2	F値変化量
1	T1 認知的再解釈 ¹⁾	.46	9.62***	.23	37.65***
	T1 正感情	-.02	-.36		
	T1 負感情	-.02	-.29		
2	T2 正感情	.13	2.29*	.01	2.62†
	T2 負感情	-.04	-.69		

モデル $R^2 .24(F(5, 383)=23.83, p < .000)$, β はステップ3の値

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$, 説明変数はすべて各平均値からの偏差

¹⁾認知的再解釈コーピング, T1:入学, 始業式直後, T2:中間テスト後, T3:期末テスト前

負感情, 第2ステップでT2の正感情と負感情を順次, 投入した。その結果, 男女ともにT2の正感情からT3の認知的再解釈への有意な正の係数が示され(男子: $\beta = 0.14$, 女子: $\beta = 0.13$ ともに $p < 0.05$), 男女ともにT2の正感情は重決定係数の増分 R^2 変化量に有意な増分の傾向がみられ, 正感情は後の認知的再解釈を高める傾向があることが示された。

4. 認知的再解釈から正感情への影響について

次に, 認知的再解釈が後続の正感情に及ぼす影響を検討するため男女別に, 2ステップからなる階層的重回帰分析を行った(表5, 表6)。これらの説明変数の測定についても, 多重共線性を回避するために, すべて各平均値からの偏差に変換した。第1ステップでT1の正感情, 認知的再解釈, 負感情, 第2ステップでT2の認知的再解釈と負感情を順次, 投入した。その結果, 男女ともにT2の認知的再解釈からT3の正

表5 男子における T3 の正感情を目的変数とした階層的重回帰分析

ステップ	説明変数	β	t 値	ΔR^2	F 値変化量
1	T 1 正感情	.38	6.60***	.31	42.68***
	T 1 認知的再解釈 ¹⁾	.16	2.53*		
	T 1 負感情	.02	.35		
2	T 2 認知的再解釈	.18	3.14**	.03	5.46**
	T 2 負感情	.04	.64		

モデル R^2 .31 ($F(5, 279)=28.60, p < .000$), β はステップ 3 の値

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$ 説明変数はすべて各平均値からの偏差

¹⁾ 認知的再解釈コーピング, T 1: 入学, 始業式直後, T 2: 中間テスト後, T 3: 期末テスト前

表6 女子における T3 の正感情を目的変数とした階層的重回帰分析

ステップ	説明変数	β	t 値	ΔR^2	F 値変化量
1	T 1 正感情	.38	7.91***	.26	44.68***
	T 1 認知的再解釈 ¹⁾	.00	-.05**		
	T 1 負感情	.01	.24		
2	T 2 認知的再解釈	.30	5.86***	.07	21.35**
	T 2 負感情	.13	2.42*		

モデル R^2 .33 ($F(5, 383)=38.18, p < .000$), β はステップ 3 の値

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, 説明変数はすべて各平均値からの偏差

¹⁾ 認知的再解釈コーピング, T 1: 入学, 始業式直後, T 2: 中間テスト後, T 3: 期末テスト前

感情への有意な正の係数が示され (男子: $\beta = 0.18$, $p < 0.05$, 女子: $\beta = 0.30$, $p < 0.01$), 男女ともに T 2 の認知的再解釈の重決定係数の増分 R^2 変化量に有意な増分がみられ, 認知的再解釈は後の正感情を高めることが示された。

IV. 考 察

本研究は, 高校生における抑うつ傾向を改善するための介入プログラム構築の基礎知見を得るため, 正感情と認知的再解釈コーピングの各因子間の相互の関係について検討した。研究方法としては, 1 学期間に約 5 週間間隔で同じ査定道具により 3 回の調査 (T1, T2, T3) を行うという予測的パラダイムによって実施した。このことにより, T 1 の変数を統制し, T 2 の説明変数である正感情, 認知的再解釈コーピング (T 1 から T 2 の時間的な変化) が, 目的変数である T 3 の認知的再解釈コーピング (T 1 から T 3 の時間的な変化) や T 3 の正感情 (T 1 から T 3 の時間的な変化) をより精度高く予測することができた。その結果, 男女ともに認知的再解釈コーピングは後の正感情を高めることが示された。また, 正感情も後の認知的再解釈コーピングを高める傾向があることが示された。以下に本研究の成果と今後の課題について示す。

1. 正感情から認知的再解釈コーピングへの影響

まず, 正感情から認知的再解釈コーピングへの影響について見ていきたい。本研究の階層的重回帰分析では, 正感情と認知的再解釈の関連について, 男女ともに正感情から認知的再解釈への正の影響の傾向があることが確認された。統計的には正感情から認知的再解釈への正の影響の傾向という程度であった。この結果からは, 正感情が認知を広めるコーピングである認知的分析をもたらすという知見⁷⁾を追認することはできなかった。そして, Yamasaki ら⁸⁾の正感情は認知的再解釈コーピングへの直接的な影響は認められないとする大学生での知見と同様のものであった。しかし, 正感情が高まった者は, ネガティブな材料や問題のある事態にでも入念な対処を行うという知見¹⁴⁾や, 正感情から肯定的再解釈への有意な正の直接効果が認められ, 肯定的再解釈の実行には, 特に正感情が促進的な効果を及ぼしている可能性¹⁵⁾, さらに, 正感情と認知的再解釈コーピングの双方向性の影響を追認した知見¹⁶⁾も示されている。このように, 正感情から認知的再解釈コーピングへの影響が確認されている知見もいくつかあるのも事実である。正感情から認知的再解釈コーピングへの関連は, 一貫した知見が得られない状況で, 今回も, この関連が傾向という程度であり, ポジティブな経験によって正感情が醸成され, 認知的再

解釈コーピングをもたらすという関連は確認できなかった。このことは、本研究の最終目標である今後の抑うつ予防研究において、正感情を醸成する介入で認知的再解釈コーピングを高めるという期待はかなり慎重であらねばならないという示唆が得られたと言えよう。しかし、正感情から認知的再解釈コーピングへの影響を示す研究結果がいくつかあることから、調査方法、対象などを変え、多くのデータを蓄積することで、正感情から認知的再解釈への真の影響を導き出す努力が必要であろう。このことで、高校生の学業や学校行事、対人関係等の各々の場面での認知的再解釈コーピングを促すために、正感情を醸成することの意義が確かなものとなると思われる。

2. 認知的再解釈コーピングから正感情への影響

次に、認知的再解釈コーピングから正感情への影響について見ていきたい。本研究の階層的重回帰分析では、男女ともに認知的再解釈コーピングから正感情への正の影響があることが確認された。この知見は、大学生と大学院生対象の研究で、男女ともに認知的再解釈コーピングが正感情を高め、その高められた正感情が抑うつを弱めるという知見⁸⁾や認知を広めるコーピングが正感情をもたらすという知見⁷⁾を追認できた。これは、認知的再解釈のさらなる使用はポジティブな Well-being の増加を予想させるという知見¹⁷⁾や、感情制御方略としての再評価 (reappraisers) は、抑制 (suppression) と比べて、より多くの正感情とより少しの負感情を表出する¹⁸⁾との知見からも、ストレスと認知的再解釈の関係を解くことや捉え方を変えることでストレスの多い状況について対処することにより生活満足が期待できるのではないかと考える。実際、肯定的再解釈 (「よりよく思えるように、別の視点から見ようとする」、「起こっていることの良いところを探す」) を実行すれば、疲労感や抑うつ感が低くなる可能性¹⁹⁾や、臨床実習中の抑うつ感の予測について実習の肯定評価型対処法 (経験を重要なものと捉え、自分を成長させるものと評価する方法) の少なさの関与²⁰⁾などの知見から、認知的再解釈コーピングと同じ類のコーピングの精神的健康への有効性も示唆されている。これらの知見や本研究の結果から、高校生の精神的健康を高めるためには、積極的に認知的再解釈コーピングのスキルを高めることを支援する人的・物的環境の整備が急がれる。高校生は学校において、学業や

友人、教員との対人関係でさまざまなストレスにさらされている。これらの多様なストレスに対して認知的再解釈コーピングをすすめることが正感情をもたらす精神的健康の維持につながるということが確認された。今回、男女ともに認知的再解釈コーピングから正感情への影響が追認できたことで、正感情と認知的再解釈コーピングを抑うつ予防の介入操作因子とすることが、抑うつ予防に好影響をもたらすことが期待される。

3. 今後の課題

本研究は高校生を対象に、階層的重回帰分析を用いて正感情と認知的再解釈コーピングの関係を調べた。その結果、男女ともに認知的再解釈コーピングは、後の正感情を高めることが確認された。また、正感情も後の認知的再解釈コーピングを高める傾向があることが示された。認知的再解釈コーピングが後の正感情を高めることについては、これまでの知見で確認されている。一方、正感情が後の認知的再解釈コーピングを高めるかどうかについては、先行研究も結果が一貫していない。今回の結果は、正感情が認知的再解釈コーピングを高めるとする知見を支持するものとはならなかった。この問題については、今後、同様の研究の追試を行うことで、詳細が明らかになるだろう。また、正感情と認知的再解釈コーピングの相互の関係について、今回の予測的研究において、性差はみられていない。しかし、先行研究では性差の指摘もあることから、今後も性差の問題には慎重でなければならぬだろう。さらに、今後、高校生の生活実態を知るうえでも、ストレスの種類と認知的再解釈の関係についてもおさえない。今回は予測的研究手法を採用したことにより横断的手法と比較すると、正感情と認知的再解釈コーピングの間の関係を、より詳細に把握できたのではないかと考える。本研究の知見から今後、ユニバーサル予防としての抑うつ予防を行う場合、正感情を高めることで健康や適応を高めるという過去の知見²¹⁾に加えて、認知的再解釈コーピングをすすめることで正感情が醸成され抑うつを低減をはかることの有用性が示唆された。そこで、例えば正事象の採取に加えて、ストレス事象に対して正の意味を探求する活動などを行うことが考えられる。このような活動は通常の高校生活をしている全員の生徒たちへのユニバーサル予防として活用できる。今後、正感情を高める介入に加えて、認知的再解釈コーピングをすすめる活動を行うこ

とで正感情を醸成する自己コントロール型のプログラムを、抑うつユニバーサル予防として学校の中で早期に行いたい。

付 記

本稿に関する内容は2009年8月27日の日本心理学会第73回大会で発表されました。本研究に際して、ご協力くださいました高校生および関係者の皆様に深くお礼申し上げます。

文 献

- 1) 警察庁生活安全局地域課, 平成21年中における自殺の概要資料, 2009.
- 2) 厚生労働省, 平成20年人口動態統計月報年計(概数)の概況 厚生労働省大臣官房統計資料部, 2008.
- 3) 山口裕子, 山口日出彦, 原井宏明, 他. 高校生における抑うつ群, 推定うつ病有病率の3年間の縦断的研究. 臨床精神医学 2009; 38: 209-218.
- 4) Folkman S, Lazarus RS. An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and Social Behavior* 1980; 21: 219-239.
- 5) Folkman S, Moskowitz JT, Ozer EM, et al. Positive meaningful events and coping in the context of HIV/AIDS. *Coping with chronic stress*. Gottlieb BH (Ed.), New York: Plenum 1997; 293-314.
- 6) Fredrickson BL. Cultivating positive emotion to optimize health and well-being. *Prevention & Treatment* 2000; 3: 1-25.
- 7) Fredrickson BL, Joiner T. Positive emotions trigger upward spirals toward emotional well-being. *Psychological Science*, 2002; 13: 172-175.
- 8) Yamasaki K, Uchida K, Katsuma L. An intervention study of the effects of positive affect on the coping strategy of "finding positive meaning" and on health psychology. *Health and Medicine* 2008; 13: 597-604.
- 9) Watson D. Intraindividual and interindividual analyses of positive and negative affect: Their relations to health complaints, perceived stress, and daily activities. *Journal of Personality and Social Psychology* 1988; 54: 1020-1030.
- 10) 佐藤 徳, 安田朝子. 日本語版 PANAS の作成. 性格心理学研究 2001; 9: 138-139.
- 11) 佐藤 徳, 安田朝子, 児玉千穂. 3要因モデルに基づく, 抑うつならびに不安症状の分類—多次元抑うつ不安尺度の作成. 性格心理学研究 2001; 10: 15-26.
- 12) 佐々木恵, 山崎勝之. コーピング尺度(GCQ)特性版の作成および信頼性・妥当性の検討. 日本公衆衛生雑誌 2002; 49: 399-408.
- 13) Aiken LS, West SG. *Multiple regression: Testing and interactions*. Newbury Park, CA: Sage. 1991.
- 14) Trope Y, Pomerantz EM. Resolving Conflicts Among Self-Evaluative Motives: Positive Experiences as a Resource for Overcoming Defensiveness. *Motivation and Emotion* 1998; 22: 53-72.
- 15) 大塚泰正, 鬼頭愛子, 堀 匡. 労働者の肯定的再解釈コーピングを促進する要因に関する縦断的検討. 広島大学心理学研究 2008; 8: 129-135.
- 16) Burns AB, Brown JS, Ericsson NS, et al. Upward spirals of positive emotion and coping: Replication, extension, and initial exploration of neurochemical substrates. *Personality and Individual Differences* 2008; 44: 360-370.
- 17) Haga SM, Kraft P, Corby EK. Emotion Regulation: Antecedents and Well-Being Outcomes of Cognitive Reappraisal and Expressive Suppression in Cross-Cultural Samples, 2009.
- 18) Gross JJ, John OP. Individual Differences in Two Emotion Regulation Processes: Implications for Affect, Relationships, and Well-Being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2003; 85: 348-362.
- 19) Otsuka Y, Sasaki T, Iwasaki K, et al. Working hours, coping skills, and psychological health in Japanese daytime workers. *Industrial Health* 2009; 47: 22-32.
- 20) 立石恵子, 立石修康. 作業療法学科臨床実習における学生の抑うつとストレスコーピング. *Journal of Kyushu University of Health and Welfare* 2006; 7: 173-176.
- 21) 貴志知恵子, 内田香奈子, 山崎勝之. 正感情と心身の健康との関連—高校生を対象とした横断的研究—. 学校保健研究 2009; 51: 151-161.

[Summary]

The purpose of this study was to investigate the rela-

tion between positive affect and cognitive reinterpretation coping in senior high school students. The participants were 285 boys and 389 girls in the 1st and 2nd grades. Participants completed the Japanese Version of Positive and Negative Affect Schedule Scales to measure positive affect and negative affect and the General Coping Questionnaire to assess cognitive reinterpretation. These two measures were administered three times (T1, T2, and T3), about five weeks apart. Hierarchical regression analyses of the data showed that when the three variables at T1 were controlled for, cognitive rein-

terpretation at T2 significantly enhanced positive affect at T3 in both sexes. These findings provided evidence for the positive relationship between positive affect and cognitive reinterpretation coping. The possibility to utilize the enhancement of positive affect and cognitive reinterpretation in prevention programs for depression and school refusal is discussed.

[Key words]

positive affect, negative affect, cognitive reinterpretation coping, depression, senior high school students